

NUPRI NEWS

Nagano Urban Policy Research Institute

NPO法人
長野都市経営研究所

Vol.41

2011.AUG.

NPO法人 長野都市経営研究所

発行/NPO法人 長野都市経営研究所 〒380-0834 長野市大字鶴賀問御所町1289-1 丸本ビル2F TEL 026-235-7911 FAX 026-235-6166 <http://www.nupri.or.jp> E-mail: nupri@nupri.or.jp

市川理事長 挨拶骨子

3月11日の大震災からすでに100日近くが経過しました。いまだにメドがつかない現状にあって、産業界ではリスクヘッジによる海外シフト、特に中国シフトが急速に進んでいることを実感する昨今です。被災地の復興と平行し、地元の企業がどう生き残っていくかも非常に重大な課題となっております。この状況は、今後NUPRIがどうあるべ

きか、地域の活性化のために何をすべきかを検討するうえでも厳しい環境をもたらしております。現実的に、現在NUPRIは会員数が減少を続け、経営的にも実質的に赤字になりつつある状況です。だからこそ、原点に立ち返り、事業目的や内容を構築し直すべきだと考え、本日は中長期計画委員会による懇談の場を設けております。

政治・経済の各現場で、強いリーダーの登場が待たれる昨今ですが、NUPRIにおきましては皆さんの発想力、行動力に、リーダーを補って余りある頼もしさを感じております。今後ともぜひお力添えをお願いします。

去る6月17日（金）、第17回NUPRI定時総会がホテル国際21にて会員100社のうち70社（うち委任状30）の出席により開催されました。

市川理事長を議長に、田中・鈴木両理事を議事録署名人に選任した後、平成22年度の事業・決算報告ならびに平成23年度の事業・予算計画が藤牧専務理事より上程され、各議案とも出席者の拍手をもって承認を得ました。

政治、経済、産業、文化のあらゆる面で、震災後の混乱が収束していない状況の中で、NUPRIの存在意義と役割も今年

初頭から大きな変化を生じています。さらに新幹線延伸はいよいよ3年後に迫っています。そこで今回はNUPRIがすべきこと、できることを改めて検討する機会として、中長期計画委員会が進行役を務める特別懇談会が開催されました。

議事に続き、著書『ゾウの時間ネズミの時間』で知られる生物学者・本川達雄氏の講演会を開催。混迷する時代に、モノの見方を変えて発想の転換を図ろうと説く本川氏の講演に、一般来場者も含む200名以上の聴衆が熱心に耳を傾けました。またその後、本川氏を囲んでなごやかな懇親会が行われました。

第17回 NUPRI 定時総会開催

震災後の日本と2014年を見据え、 地域の活性化のために NUPRIが今、できること。

平成23年度事業計画

【NUPRIの活動方針】

昨年度は「スポーツで切り拓く長野の未来」をテーマに取り組み、AC長野パルセイロのJFL昇格という悲願を達成することができました。しかし、その喜びもつかの間、東日本大震災による負の連鎖の拡大に直面しています。いまだ道筋が見えてこない状況ではありますが、年初より活動を開始していた中長期計画委員会の中間報告の答申にある「今後ともこの組織を残してゆくべき」との結論を真摯に受け止め、環境が大きく変わろうとしている今こそ、それに機敏に対応し、行動していきたいと考えます。各研究部会、委員会活動も、この指針に沿って進めてまいります。今後とも皆様のご協力、ご支援をお願いいたします。

1 「わいがやサロン」〈岩野彰座長〉の活動

昨年度は「食」をテーマに、生産から消費の各プロセスでこだわりを持って取り組んでおられる人を中心に幅広い分野でご活躍の方々と講師に迎え、第23回から第28回まで有意義なサロンを開催し、ご参加の方々から高い評価をいただきました。今年度もさらに充実させていく所存ですが、会員の皆様の周囲にいらっしゃる「話題の人」「話を聴きたい人」など、講師にふさわしい人をぜひご紹介いただければと思います。

2 平成23年度研究部会・

委員会の事業計画

(1) 新産業創出研究部会



〈竹内 伊吉 部会長〉

産学共同研究による新産業創出の手法を研究し、引き続き地域の農業特性を活用して事業化を推進します。生産者から消費者への直接的な販売方法の検討、展開ならびに農業の事業化に向けた企業の連携、調査を、農商ユニオンとの連携を強めながら実行していきたいと考えます。

具体的には「採れたて野菜市の継続、拡大」「りんごの木オーナー制度の継続」「自然農法の研究、啓蒙」、そしてそれらを活かした「中山間地の活性化」をすすめていきます。

(2) スポーツ・まちづくり研究部会（スポ・街）



〈鷺澤 幸一 部会長〉

AC長野パルセイロのJFL昇格の実現を受け、さらなる高み「J」への夢に向かって取り

組みを進めていきます。具体的には①専用スタジアム建設を含む「J」昇格活動への協力、②ホームゲーム動員の支援、③「小中学生」をホームゲームに招待、④スタジアム建設に伴うまちづくり検討などに取り組みます。

その他スポーツ全般の普及活動として「Niko Sports Academy」プログラムによる取り組みを長野、須坂、中野各市で継続し、子どもたちのスポーツを楽しむ心を育む活動をめざします。

(3) Strategy 2014 研究部会

(ストラテジーニイマルイチョン)



〈夏目 潔 部会長〉

行政や他の団体のテーマや課題とは一線を画し、NUPRIだからできる、しかも実践を伴うテーマとして「観光」に的を絞って研究・施策を進めていくことを決定しました。当地域での滞留時間を長くし、消費金額を大きくするための取り組みとして、人々が求める観光資源と地域に眠っている観光資源のマッチングと、それらをテーマ別・四季別の情報として整理、体系づけていきます。そのために会議を多く開催し、早い時期の実践に向けて歩み出します。皆さんの積極的なご参加を期待します。

(4) TMO特別委員会

〈夏目潔委員長〉

引き続き「株式会社まちづくり長野」の諸事

業に、取締役会等を通じて関与していきます。

現在、①「ばていお大門」の経営、②「とまと食品館」の経営、③「もんぜん駐車場」の経営、④「共通駐車場」の推進、⑤インキュベーター事業の推進、⑥「楽茶れんが館」の運営、⑦その他まちづくり事業を行っています。皆さんもぜひ積極的にご意見、アイデアをお寄せください。

(5) 長野まちづくりを考える委員会



〈竜野 泰一 委員長〉
(鈴木副委員長が代理で報告)

昨年取り組んだ「門前暮らしのすすめ」の諸団体から得たヒントを基に、今年度はその検証を行い、まちづくりに関する各種会議・イベントに参加しながら、情報や仕組みを蓄積する時期と考えています。今後、NUPRIとして何をやっていくかを、中長期計画委員会とも連携して検討を重ねていく所存です。

懇談会／中長期計画委員会の 中間報告ならびに討論

1994年の創設から17年を経たNUPRIが、激変する社会情勢に対応しているかどうかを検証しつつ、存在そのものの必要性の有無も含めて、今後に向けたあるべき姿、なすべき活動を討議するために、中長期計画委員会が創設されました。

委員会では年時から会議を繰り返し、常に委員同士のきたんのないフリートークの中から問題点を浮き上がらせ、短期・長期の各視点でとらえると同時に、財政的な問題も踏まえながら方向性を検討し、今般の中間報告に至っています。



〈掛谷 嘉則 委員長〉

1 NUPRIの組織としての検証

まず、長野市を中心としたオリンピックゾーンの将来のあるべき姿を研究し、その実現に向けて提言・実践活動をしていく団体としての原点を再確認したうえで、過去の活動・現状の活動・存続について検証を行いました。

1998年の長野冬季オリンピックの成功を支え、その後の地域活性化に一定の役割を果たしてきたNUPRIですが、現在、明確な提案と行動

「テーマ」を持ち得ておらず、停滞感があり、寄付・協賛団体的な側面が強くなっているという現状は否めません。しかし、

①提案と実行を兼ねた活動を行う組織であること

②公的な補助金を受けておらず、実行に際しささまざまな制約とは無縁であること

③企業を主としたNPOであること

の観点から、全国的にも希有な組織であり、これらの特性を活かして今後とも「組織」として残す方向で考えてゆくべきであろうとの結論に達しました。

2 今後のNUPRI

「存続」を前提に、次のことを検討・実践する必要があるとみています。

(1) 各部会の活動について、財政面からの視点と連携の欠如という観点から、いったんリセットして洗い直しをする必要がある。

(2) 会員企業間の事業活動を活かした連携を考え、組織としての一体感を作り上げていくことで、会員の拡大を図っていくことができる。

(3) 支出内容を見直すとともに、NUPRI自身が事業をする可能性を検討し、財政面での健全化を図っていく。

(4) 東日本大震災を契機として

①企業にとって地域の重要性を再認識する機会となり、企業間の連携のあり方の再検討が求められている

②地域コミュニティの大切さをどう認識し、どのように作り上げていくのかに目を向ける必要がある

③地域・企業にとつての長期的視点に立った危機管理を考える必要がある

こうしたことを踏まえ、中長期計画委員会としては多くの会員の知恵をいただき、組織、財政、行動における各テーマにおける具体的なロードマップを作成していく予定です。ついては、現在の会員各位のご意見を、この場でぜひご発言ください。

3 会員意見

以下、出席の会員から寄せられた意見を要約、紹介します。中長期計画委員会では、これらの貴重なご意見を参考に、各部長、委員長とすり合わせを図り、さらに会員の皆さんとの懇談を重ねながら、3ヶ月後ぐらいをめどにNUPRIの将来を描いていきたい考えです。

・現状、単なる補助金団体となんら変わらない印象がある。具体的に活動している内容が会員に見えない点、その大きな理由と思われる。

地域を活性化させるための原点のひとつとして「教育」がある。子どもが地域に誇りを持つてすくすくと成長し、大人になっても愛着をもってそこで暮らすということが続いていくことが、元気な地域を作っていくはずだ。そのために必要なことは、個人も企業も行政も一体となり、地域ぐるみで子どもたちを育てていく意識と仕組みではないだろうか。そのこと自体には、それほどお金はかからない。NUPRIも

視点を変えて、「子どもにとって大事なものは何か」という観点からまちづくりを考えてみてはどうだろうか。

・17年という歳月を考えると、創立当初と比べ、NUPRIの組織もかなり成熟してきていると想定できる。その実績と参加者の顔ぶれに鑑み、NUPRIは数ある地域づくりのNPOや専門団体の活動を客観的に評価・判定することができる希少な組織ではないだろうか。そういう面で存在価値を発揮していくことに期待する。

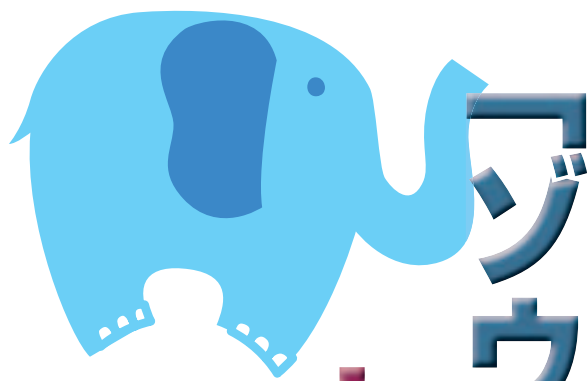
また、2014年の新幹線沿線で、長野駅が観光客にとっていわゆる通過駅になることは確実と思われる。着駅として存続するための施策に固執するのではなく、「立ち寄りエリア」としての魅力を発信することに、NUPRIとして知恵を絞っていったらどうか。

・5町歩という全国屈指の広さで自然農法を実践してきた経験と実績から、中山間地の遊休農地を実践的に改革、活性化していく方向性が具体的に見え始めている。新産業創出部会の活動を通じて、今後、技術面も含めさらに啓蒙をすすめていきたいと考える。

これからのNUPRIの活動に関しては、大きな柱として「都市部の活性化」「中山間地の再生・活性化」「スポーツ」の3点に絞り込んでもいいのではないかと感じている。特に啓蒙活動という点では影響力も大きいと思うので、質の高い「わいがやサロン」や講演会などをNUPRIの活動としてもっと広く浸透させていってはいかがか。いずれにしても、大きなことに大上段で取り組むのではなく、一つひとつの活動をさらにフォーカスさせていくことが、特に今年度は必要ではないかと思う。



講演会



ゾウの時間 ネズミの時間

「モノの見方が変わると発想も変わる」

講師 もとかわ たつお
本川達雄氏
生物学者／東京工業大学大学院生命理工学研究科教授

総会に続き、生物学者・本川達雄氏の講演会が開催されました。

地球環境、資源エネルギー、食料、少子高齢化など、解決すべき大きな問題を抱えるなかで、予想もしなかった未曾有の大災害を経験した日本人。過去の反省を未来へどう活かすか、一人ひとりが真剣に考えなくてはいけない今、生物学的見地から社会を見つめる本川氏のお話はタイムリーで興味深く、集まった200人以上の人々を魅了しました。また「歌う生物学者」の肩書き通り、ご自身の歌声も織り込みながらのユニークで楽しい講演に、盛んな喝采が送られました。

※記載内容は約1時間30分の講演を編集部で抜粋、要約したものです。

● 時間は本当に万物共通か？

私が研究しているのは食べられないナマコ、すなわち世の中の何の役にも立たないものであります。にもかかわらず、かくも大勢の皆さんが聴きにきてくださり、さすが長野県は教育県だと感じている次第です。

実は、つい2日ほど前に、新潮新書から『生物学的文明論』という著書が発売になりました。今まで、私たちは世の中のあらゆるものを効率やお金という物理学的なものに置きかえることで豊かになってきました。果たして本当に豊かになったのだろうか、生物学的に世の中を見れば、今までとは違う視点でこれからの生き方をとらえていけるに違いない、といった意図で執筆した本です。折しも、その編集を

している3月に、あの震災が起きました。私は仙台出身でして、実家はやはりガチャガチャになりました。偶然のタイミングとはいえ、日本人が今までの生き方を考え直し、新たな視点で未来を見つめていく時期にきたことを感じずにはいられません。

震災の前から、私たちは地球環境、資源エネルギー、そして少子高齢化という大問題を抱えていました。いずれも、のびきならない状態になっているにもかかわらず、解決の道が見つかからないという状況です。それを「生物学」の見方で考えてみようというのが、本日の私のお話です。

キーワードは「生物学的時間」、つまり「ゾウの時間、ネズミの時間」です。

一般に「時間」というのは、天体の動きに基礎を置く万物共通の「絶対時間」と考えられています。ニュートンが提唱した古典物理学的な見方による時間、すなわち地球の回転と同調するリズムを持つて、一直線に流れていく時間です。それがすべての生き物にも共通すると、私たちは教えられてきました。

しかし、生き物は「時間」を感じる感覚器官を持つてはいないのです。光を目で、音を耳で感じるように、時間を感じる器官はありませんね。ミヒヤエル・エンデは『モモ』のなかで時の仙人に「心で感じる」と言わせましたし、アリストテレスもそう唱えまし



た。アウグステイヌスは『告白』で、時間は「精神」もしくは「魂」の延長だと言いました。とはいえ、時間が流れていることを表現する実態というものはないのです。

私たち生き物が時間を体感できる器官があるとすれば、それは心臓の拍動でしょう。人間は1分間に60〜70回と、かなり規則正しく拍動を刻んでいます。これは動物によって違いがあり、ハツカネズミは1回のドキンが0.1秒、つまり1分間に600回も鼓動を刻むわけですね。猫は0.3秒、人間は1秒、馬は2秒、ゾウは3秒、クジラにいたっては9秒もかかります。身体が大きいものほど1回のドキンに時間がかかるのです。これをグラフにしてみると、「心臓の1拍の時間は体重の4分の1に比例してゆっくりになっていく」ことが明らかにになります。つまり体重が10倍になると、時間は2倍になるといふことなのです。呼吸もやはり同様です。いろいろ調べてみますと、腸の揺動も、血液の一巡も、懐胎期間も、そして寿命さえも同じように体重の4分の1に比例してゆっくりになります。

また、ハツカネズミもヒトもゾウも呼吸は1回の間に心臓は4拍打ちます。腸が1回揺動する間に心臓は11回、血液が一巡する間に心臓は80回、そして親の心臓が2千3百万回打つと子が生まれ、心臓15億回ですべてが死ぬ……。これがほ乳類のほぼすべてに共通しています。従って生物学的に見ると、生き物がそれぞれに違う時計を持って生きていることがわかりますね。

●大きな組織になるとサボる個体

なぜ身体が大きいほど時間がゆっくりなのか、その正解は見つかっていません。しかし「エネルギーをどれだけ使うか」と深い関わりがあるのではないかと、私は考えています。



こうした研究は、100年ほど前にヨーロッパで始まりました。牧畜が盛んな地で、牛や羊の身体の大きさに対してどれだけエサを与えたらよいかの研究が起点となりました。

もちろん身体の大きい動物はエサもたくさん食べます。ところが体重あたりのエネルギー消費量は、身体の大きいものほど小さいんですね。生き物の細胞一つひとつの大きさはほとんど同じです。細胞数自体は身体が大きい動物が多い。しかし個々の細胞を見ると、ゾウではハツカネズミの18分の1しかエネルギーを使っていないのです。ということは、見方を変えると大きな組織の中の細胞ほどエネルギーを使っていない、つまり「サボっている」ということになり、組織論に共通するという仮説が生まれるわけです。

私の研究室には小さなホヤがいます。これは芽を出して、血管でつながった同じ個体をどんどん作っていきます。おもしろいことに個体が増えて組織が大きくなればなるほどエネルギーを消費しなくなるのです。逆に血管を切って分離し、孤立化させるとその個体が俄然働き始めるのです。つまり分社化すると働くわけですね。

ミツバチもまったく同様です。巣が大きくなると働かないハタラクバチが出てくるのです。ところが分蜂すると、それまで働かなかった個体が再び活発に働くようになる。どうやらエネルギー消費量はシステム全体の大きさによって変わってくるらしいの

です。物理学でいうように「 1×10^{11} 」にはならないわけです。

さらに注目すべきは、このエネルギー消費量が体重のマイナス4分の1に反比例する、つまり生物の時間とエネルギー消費量はみごとに反比例の関係にあるわけです。

心臓1拍の時間×エネルギー消費量は、ゾウもハツカネズミも2ジュールです。一生の間にはゾウもハツカネズミも30億ジュールを使う。しかしゾウの寿命は70年あり、ハツカネズミは3年で死んでしまふ。わずか3年という一生は「絶対時間」としては短いわけですが、その間にゾウと同じ30億ジュールを燃やしている。駆け抜けるような炎の人生です。つまり大きいものには大きいものの、小さいものには小さいものの、生きていく上での戦略があるのですね。時間が違えば世界が違ふといってもいいでしょう。

そう考えると、何ごとも時計の時間、物理的な世界観でバサバサ切り捨てていくのはいかがなものか。私たちは世界がもつ多様性に富んでいることを認識したうえで、ものごとを見ていかななくてはならないのではないかと考えるのです。

●時間とエネルギー消費量の深い関係

なぜエネルギー消費量と時間が関係してくるのでしょうか。

物理学でいうところの「時間」が直線的で、進んだら戻らないのに対し、生物の時間は回転しています。身体の仕事、呼吸器も消化器も循環を繰り返して時を刻みますね。思想的にも古代から時間を回すものにとらえてきた民族は多かった。インドにおける輪廻転生の考え方によく現れています。日本でも「還暦」という言葉が象徴するとおり、回る時間が基本でした。お正月の「おとしだま」は「歳魂」

つまり米の魂を餅として体内に取り込み、新たな年を迎える行事です。これも時間が回るといって考え方の反映ですね。時間は回ることにより、いったんリセットして、新しいものとして永続するようにできているのです。

一方のユダヤ・キリスト教の文化では、まったく「神様の時間」が流れている。西洋の自然科学は、いわば世俗化したキリスト教です。経済学においてもそうですね。それが現代の硬直した世界観の底辺にあると私は考えています。

さて、地球の歴史は46億年、生命の歴史は38億年といわれていますが、DNAやアミノ酸配列といった最初にできた生命のプロトタイプが、今もまったく同じかたちで続いています。実際に永続するシステムができています。

たとえば永続する建物を作ることは可能でしょうか。数千年という世界遺産の建物は確かにありますが、それも決して永続していくわけではない。いつかはエントロピーが増大して壊れていく。ところが、日本の伊勢神宮は20年ごとに式年遷宮を繰り返して、まったく同じものを建てることにより、新しくなつて永続していく仕組みが今に続いています。これは世界にも例を見ないシステムですね。まさに新たな生命Ⅱ子どもを作つて、時間をつなげていく生命の仕組みと同じですね。

子どもを生み出すためにはエネルギーが要るわけですが、非常におもしろいことに、ミオシンサイクルと呼ばれる筋肉の収縮速度もまた体重の4分の1に反比例しています。ここでも時間とエネルギー消費は深い関係を持っているのです。

これを西洋の人々に伝えると、「それはサイクルであつて、タイムではない」といわれてがっかりするわけですが、しかし、時間とエネルギー消費量の関係を見ることで、今まで見えなかったものがたくさん見えてくるのです。

この時間の見方はもちろん人間にも当てはまりません。

エネルギー消費量は年齢とともに小さくなつていきますから、年齢が進めば進むほど時間はどんどんゆつくりになつていくのです。

「年々時間が経つのが早くなる」とおっしゃる方がいるでしょうね。心理学でもいわれることですが、時間というのは、そのなかにいる時と後から振り返る時とは逆になるのではないかと思うのです。こうしてつまらない講演を聴いている時間を、皆さんは長く感じるでしょう。でも家へ帰つて振り返ると記憶に何も残っていないとか。恋人と過ごす時間はあまりにも短いけれど、知らないうちに長い時間が経過していたとか、よくあるでしょう。

繰り返しますが老人の時間はゆつくりです。ゾウ的なんですね。一方、子どもの時間はネズミ的であるということが出来ます。早さもそうですが、睡眠時間も共通しているのですよ。ゾウは4時間ぐらゐしか眠りません。一方ハツカネズミは14時間眠ります。時間が違つたら、その時間のなかで最もいい生き方を考える知恵を、これから蓄積していく必要があるのではないのでしょうか。

● エネルギーを消費して 時間を買った結果とは

こうした時間の考え方は社会生活にも当てはまります。

今日、新幹線であつという間に東京から長野へ来たことをはじめとし、何でも早くて便利な世の中になつています。言い換えると、それだけエネルギーを消費しているということです。

エネルギーを使うと、時間は早く進みます。「時は金なり」とフランクリンは言いましたが、まさに現代のビジネスは「時間」と「エネルギー」と「金」

のトライアングルで成り立っているのではないのでしょうか。そして「消費」もまた、この仕組みのなかにあります。人はお金を出してエネルギーを買つて余暇の時間を手に入れます。

従つて「時間を操作している」という意識で見つめ直すと、もっと賢いビジネスや消費ができるようになるのではないのでしょうか。

現代日本人のエネルギー消費量は、人体が消費するエネルギー量の40倍といわれています。縄文の時代の人々と比べ、現代人の時間の早さは40倍と想定できるわけです。しかし身体の時間は昔と変わっていません。そんなに早くなつてしまった時間に、身体が追いついていないところが、現代人の不幸ではないのでしょうか。





便利になったのは確かですが、子どもから大人までストレスや疲労感を感じて生きています。

こんなに便利で豊かといわれる時代に、日本人の顔つきは必ずしも明るくありませんね。自殺も増えている。実は幸せではなく、拷問を受けて続けているのではないのか。技術は幸せのためにはあるはずなのに、実は欲望をかき立てて人々をむしろ不幸へと導いているのが、現代の技術なのではないかと思えてならないのです。

時間は環境の一種だと私は考えています。環境が安定していてこそ、私たちはそのなかで安心して生きてゆけるのです。現代の最大の環境問題は「時間環境」の汚染だと私は考えています。

その解決策は、エネルギーを使わないことにはなりません。つまり時間環境の問題解決は、そのままエネルギー問題の時間解決につながるのです。

原発がダメなら再生可能なエネルギーに転換しようという話になっていますが、なぜエネルギーを減らそうという話にならないのでしょうか。何でも貨幣価値に置き換えて、簡単に交換できると見るのが昨今です。そういう価値観のなかでは、何でも1本のものさしで測ることができます。そして量の大小が豊かさの基準となる。しかし実は「豊か」には多様性があり、たったひとつのものさしで測りきれ

ものではないということに、私たちはそろそろ気づかなくはないといけない。物理学一辺倒のものの見方から脱却し、生物学のものの見方へと換えていくことが、より現実に見合う「幸せ」を考える契機となるのではないかと主張したいのです。

●意味のある時間を送るために

さて、現代人はエネルギーを消費して時間を生み出すことにより、寿命も延ばしてきました。縄文時代の寿命は31歳、室町時代は33歳、江戸時代は45歳、明治時代は48歳、そして昭和22年は52歳だった寿命が、平成12年には実に82歳まで延びています。

基本的に野生では老いた動物はいません。老いて生殖機能を持たなくなった動物は、世代交代のためにすみやかに消え去るべし、というのが、生物学的な大原則です。人間の場合、心臓が15億回に至るのは41歳です。つまり生物学的には50代以降の生は、技術によって生かされている人工生命体みたいなものなのです。だからこそ人類の英知の賜として恥ずかしくない、意味のある時間を送らなくてはいけないと思うわけです。

少子高齢化とは、子どもを産めない人と子どもを産まない人ばかりになってしまった結果といえるでしょう。先ほどの伊勢神宮方式で見た場合には、子や孫は「私」です。「私」を次の世代へ渡して、永続していくことが生きるといえることにほかなりません。しかし、戦後、日本人の考え方の「私」の範囲が非常に狭くなりました。さらに空間的にも「私」の範囲が狭まっています。本来、生物はその環境のなかで生きています。環境も「私」の一部といえるでしょう。

こうしてみると、産むことに消極的で、

環境の破壊に無神経な現代人の時間・空間のとり方は、生物学的に滅びの道でしかありません。私たちは、もっと「永遠」ということを考えなくてはいいと思うのです。

かつて日本人は、神道でこの世の永遠を保証され、仏教であの世の永遠を保証されるという生命観を持っていました。非常に頭のいい考え方ですね。その意味でも善光寺と諏訪大社がある長野県は素晴らしい場所だと思っております。

あらゆるものの見直しが求められる今、ぜひとも生物学の見地に立ち、もっと広いスパン、長いスパンでものごとを見てほしいものです。

講師プロフィール

1948年 仙台生まれ

1971年 東京大学理学部生物学科（動物学）卒業

1975～78年 東京大学助手、78～91年琉球大学講師、助教授を経て、91年より東京工業大学教授。現在、東京工業大学大学院生命理工学研究科 生体システム専攻教授。

棘皮（きょくひ）動物（ナマコ、ウニ、ヒトデ、ウミユリ）の硬さの変わる結合組織の研究や、群体性のホヤを使った“サイズの生物学”を研究。科学とは自然の見方、つまり世界観を与えるものだという考えのもと、生物学的世界観を分かりやすく説く著書を執筆。また理科教育も分かりやすく親しみやすいものにしようという考えから、生物学の歌をつくっており“歌う生物学者”としても知られている。

主な著作 『サンゴ礁の生物たち』（中公新書）

『ゾウの時間ネズミの時間』（中公新書）

『時間～生物の視点とヒトの生き方』（NHKライブラリー）

『生きものは円柱形』（NHKライブラリー）

『ナマケモノの不思議な生きる術（すべ）』（講談社+α文庫）

CD 『ゾウの時間ネズミの時間～歌う生物学』（日本コロムビア）